Q23 日常生活の場面になると、できないことが多く、その際、現在の指導を続けるべきか、変えた方がよいのかの判断に迷います。

特別支援学級担任

児童の特性に合わせて（書くのが苦手・手先が不器用・集中力が途切れる・運動が苦手）、〇〇トレーニングに取り組んでいますが、効果が出ているのか分かりません。

通級指導教室担当

指導したことの定着が難しく、現在の指導を繰り返すことが多いので、計画通りに進まないことが多いです・・・。

特別支援学級担任

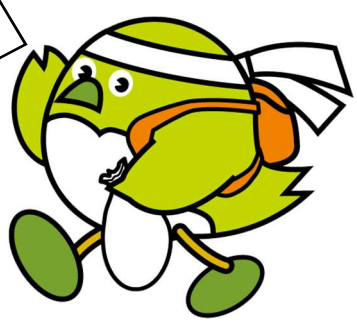
本人の困りに合わせた手立てと成果が結びつかないことがあり、このままの指導でよいのか迷っています。

Ａ　生活の中で成果が出ていないのであれば、時間における指導や教育活動全体を通じた指導での指導方法を見直し、場合によっては、指導目標や具体的な内容も見直します。

自立活動の指導に適用できる方法やその裏付けとなる理論には、心理療法、感覚訓練、動作の訓練、運動療法、理学療法、作業療法、言語治療等が想定され、また、市販の教材や指導方法として「〇〇トレーニング」や「〇〇トレ」などが紹介されています。ただ、これらの理論・方法は、いずれも自立活動の指導という観点から成り立っているわけではなく、その方法がどのように優れていたとしても、それをそのまま自立活動の指導に適用しようとすると、当然無理が生じることをあらかじめ知っておくことが必要です。

流れ図の中で検討した、〇年後の姿を想定したり、得意なことを生かしたり、課題同士の関係を整理したりしたこと等を踏まえれば、例えば、書くことが苦手ということに対しては、タブレット端末や補助具などの活用の指導、ノートやプリントのマスの配慮等も考えられ、〇〇トレーニングだけをすればよいとはならないということです。

時間における指導の教材や学習活動等を見直すことの他、教育活動全体を通じた指導での指導方法も、教職員間で配慮や手立てが共通理解され、適切に指導されているか検証する必要があります。

場合によっては、流れ図の作業に立ち返り、指導目標や具体的な指導内容の見直しが必要になる場合もあります。その際は、改めて、家庭や在籍学級の担任等から情報収集を行ったり、情報の整理、課題の整理などを見直したりします。

校内の特別支援教育コーディネーターや専門的な知識のある教員に相談したり、児童生徒が利用している医療機関で療育を担当している理学療法士、言語聴覚士、作業療法士等と連携したり、近隣の特別支援学校の巡回相談員（特別支援教育コーディネーター）から助言を得たりして、一人で悩まないようにしましょう。